

林 重雄¹：石川県加賀市塩屋海岸にソ連で使われていたアメリカ製浮きの漂着Shigeo HAYASHI¹ : Stranding record of American-made float that were used in the Soviet Union on Shioya beach, Kaga-City, Ishikawa Prefecture, Japan

網の上部につける漁業用浮きは、錘と対をなすものである（石井 1999）。これらがプラスチックで作られるようになったのは、近年のことである。いったんプラスチック製品が主流になると、以前使用されていた木製浮きやガラス浮きは姿を消し、今の本州ではめったに見られない（中西 1999）。

第二次世界大戦中の1943年、連合国側のアメリカとソ連は物資貸与協定により、ワシントン州にあったノースウエスタン・グラス・カンパニーで製造されたガラス浮きがシアトル港でロシア船に積み込まれた（Webber 1978 : Wood 1967）。その数は69万個（Wood 1967）とも、10万個（Webber 1993）とも言われるが、正確な数は不明である。

これまでこのアメリカ製浮きは北海道で入手されているが、どのような経路でどこに漂着したのかは確認できていない。今回、本州中部の石川県加賀市で漂着を確認したのでここに報告する。

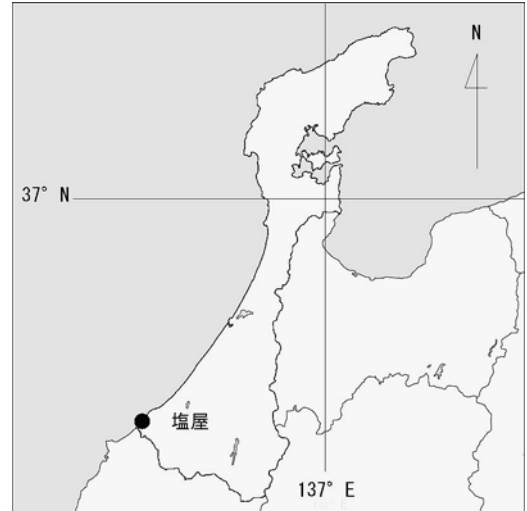


図1 石川県塩屋海岸の位置。

漂着記録 2014年1月3日、筆者は石川県加賀市塩屋海岸（図1）で、漂着物の調査中に直径9 cmほどのガラス浮きを採集した。塩屋海岸は石川県最南端部にあたり、大聖寺川の運搬する土砂が沿岸流によって運ばれて形成された砂浜海岸である。塩屋海岸ではこれまでにオウムガイ、ココヤシ、ゴバンノアシ、ワニグチモダマ、モダマといった熱帯性の動物や植物の種子・果実のほか、北方系と考えられる白樺製浮きやロシア製のウォッカ壺、アルミ製の球型浮きなどの漂着を確認している（林重雄ブログ）。

ガラス浮きは砂浜の低潮線上の漂着物密集帯に漂着していた。表面には一部藻類の付着もあるが比較的きれいな状態で、漂着後間もないものと思われた。（図2）

ガラス浮きの直径は89mm、吹き口は壺のように突出し、吹き口を封印した部分までの高さは96mmであった。ガラス浮きの色は無色透明で、製造時には三つに分かれる型に入れて作られたことを示すモールド線が明瞭に確認された。ガラス浮きの底部には、ソ連邦・クラボトレスト・ウラジオストク（С.С.С.Р. КРАБОТРЕСТ ВЛАДИВОСТОК）の文字陽刻（キリル文字：ロシア語）が読み取れた。（図3）

考察 ガラス浮きが採集された前日の2014年1月2日、漂着地点に近い福井県三国市の気象観測データによれば、一日の平均風速は5.1mで、最大風速は10.8mの西北西の風であった（気象庁ホームページ）。前々日の1月1日も同様に風は吹き荒れており、こうした強い風の影響でガラス浮きは漂着したものと推定された。また荒天の影響で1月3日の塩屋海岸には漂着物は極めて多く、モダマ2、アオイガイ2、ココヤシ2、ウスバハギ4、ソデイカ1の漂着が確認された。

浮力が大きいガラス浮きの漂着分布は広範囲に及び、海流に乗って太平洋側にも流出しており、1958年にはアメリカ西海岸ワシントン州

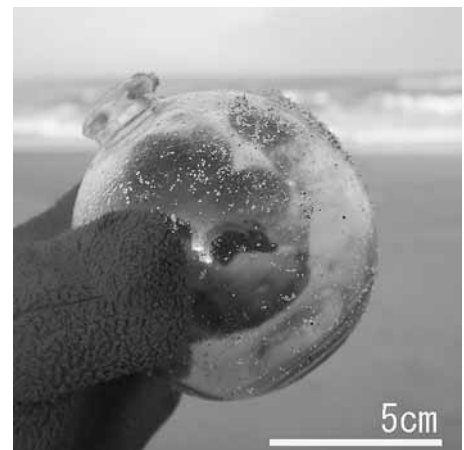


図2 石川県塩屋海岸に漂着したガラス浮き。

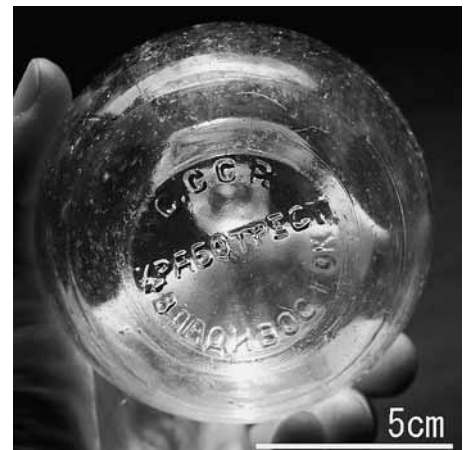


図3 石川県塩屋海岸に漂着したガラス浮きの陽刻。

のロングビーチで漂着が記録されている (Wood 1967). このガラス浮きは1943年にアメリカからロシアに渡り, 極東ロシアのウラジオストクにあったカニ漁業会社クラボトレストで使われたそうだが (Wood 1967), いつ頃まで使われていたものかは分かっていない. またクラボトレストは浮動缶詰工場を伴ったカニ漁艦隊で, この浮きは当時主流であった底刺し網 (Дупляков 2012) に使われたものであったと推測される. このガラス浮きと同型のもは, 北海道の骨董屋より入手されており (中司 2006), 北海道に漂着したものと思われるが, これまでに漂着に関する詳細な記録はない. 70年以上前に作られて, ソ連で使われたウキがどのような経路で石川県に漂着したのかは分からないが, 1990年代中ごろにはウラジオストックのカニ漁船は盛んに沿海地方沿岸に進出していたので (鈴木明彦, 私信), 最近まで日本海周辺で使用されていた可能性も考えられる.

謝辞: 本稿をまとめるにあたり北海道教育大学札幌校の鈴木明彦教授には, ロシアへ留学中に見聞された情報を教えていただき, 粗稿を見ていただいた. ここに記してお礼申し上げる.

引用文献

- Дупляков А. 2012. Промысел крабов на Дальнем Востоке (<http://www.fishnews.ru/mag/articles/10171>)
林重雄ブログ. Beachcomber's Logbook (<http://beachcomb.exblog.jp/>)
石井忠. 1999. 新編漂着物事典. 380pp., 海鳥社, 福岡.
気象庁ホームページ 気象統計情報 (<http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php>)
中西弘樹. 1999. 漂着物学入門. 211pp., 平凡社, 東京.
中司光子. 2006. ロシアが使っていたアメリカ製のウキ. プカブカ通信 (58): 3-4.
Webber B. 1978. Beachcombing and Camping along the Northwest Coast. 190pp., Ye Galleon Press, Fairfield Washington.
Webber B. & M. 1993. I'd rather be beachcombing. 125pp., Webb Research Group Publishing, Medford Oregon.
Wood A. 1967. Beachcombing for Japanese Glass Floats. 266pp., Binford and Mort, Portland Oregon.
(Received Mar. 25, 2014; accepted Apr. 20, 2014)

¹ 〒486-0844 愛知県春日井市鳥居松町3-155

¹ 3-155 Toriimatsu-cho, Kasugai City, Aichi 486-0844 Japan